

国立衛研サイエンスカフェを開店 川崎キングスカイフロントまちびらき記念で V2.3

企画調整主幹付 宮原 誠

3月28日、国立衛研が移転先として予定している川崎キングスカイフロントで、国立衛研は川崎市が主催する“まちびらき記念イベント”に参加し、サイエンス・カフェを開店し、川西副所長の司会で、“生活の安全のためのサイエンス～ジェネリック医薬品と新しい食中毒～”について話題を提供した。また、実感するサイエンスとして医療機器や医療材料に直接触れてみようという展示ブースを設置した。いずれも好評のうちに無事終了した。なお、このサイエンス・フェスティバルに先立って、この日の午前中に“まちびらき記念式典”が行われ、川西副所長が来賓として招かれた。

今年3月、川崎市川崎区殿町に開設された“川崎生命科学・環境研究センター”の一階にあるカフェテリアの一角で、このサイエンスカフェは開かれた。川西副所長は国立衛研を川崎市民に紹介し、厚生労働省の研究機関で、医薬品の審査に必要なデータの集め方や食品検査などの方法を研究する機関で、動物実験や放射能検査も行っている

と述べ、女性の多い研究所と説明した。

国立衛研が担当した一番目の話題は薬品部が提供した“ジェネリック医薬品”に関するもので、そのメリットとして、開発費用が軽減されているので安価であること、また有効性・安全性については生物学的同等試験などの調査結果に基づき審査され、新薬と同様に確保されていることが説明



川崎サイエンスカフェで説明する川西副所長（川崎市殿町にて2013年撮影）



川崎サイエンスフェスティバルの国立衛研医療機器展示ブース (川崎市殿町にて 2013 年撮影)

春休み中の多くの子供達が見学を訪れた。殿町付近は交通が不便なので、このフェスティバルのために、川崎市は専用のバスを運行したり、同市環境局の“ゆるキャラ”などを出演させたり、将来を担う子供達が科学に興味を持つようにサービスを提供した。

された。さらにその普及のために、有効成分の一般名を処方箋に使うように呼びかけているとの話もあった。フロアの市民から、副作用は無いのか、本当に安いのかなどと質問があった。

二席目の話題は衛生微生物部による“新しく見つかった食中毒”の話であった。ヒラメ中のクドア・セプテンpunkタタ (*Kudoa septempunctata*) などを例に、原因不明の食中毒が発生したとき、どのようにその原因を探っていくかを説明し、さらに馬肉などに寄生するサルコシスティス・フェアリ (*Sarcocystis fayeri*) は、ウマを中間宿主、犬を終宿主とする生活環をもつ寄生虫で、ヒトにおいても下痢症状等を引き起こす可能性が示唆されたことから、これら新しく見いだされた寄生虫に



国立衛研移転予定地 (川崎市殿町にて 2013 年撮影)

写真左にある 2 つの建物の手前が実中研、奥が川崎生命科学・環境研究センターである。国立衛研はまだ更地で水が溜まっているあたりになる予定。

よる食中毒防止を呼びかけた。

また、これらサイエンスカフェに並行して、同センターの 3 階では医療機器部による、医療機器の展示ブースが設置され、見学者は自由に触ってその機能を確認することができるように、内視鏡シミュレーターなどの手術器具、人工関節、人工乳房などが机の上に置かれていた。このわかりやすい展示に小学生から専門家まで見学者が間断なく訪れ、担当者はその対応に忙しかった。

2013 年 1 月、国立衛研はその移転計画に伴い、公益財団法人実験動物中央研究所 (実中研) とともに川崎市と“連携・協力に関する基本協定書”を締結し、向こう 5 年間相互の施設の利活用、共同研究の推進、研究者の交流など、それぞれが必要とする資源を共有することにより、相互の目標の達成に向けた取組を推進するとしており、今回のサイエンスカフェはその鎬矢となったようだ

キングスカイフロント事業

いすゞ自動車工場の跡地を殿町国際戦略拠点とし、キングスカイフロントと名前をつけて 2008 年に川崎市の事業が始まった。2013 年までに、実中研再生医療・新薬開発センター、川崎生命科学・環境研究センター、貸しラボ (川崎生命科学・環境研究センター 4 階) などがこの地域で事業を開始している。今後、当所が移転を決定しているほか、医療品メーカーの医師向け研修センターが 2014 年の開設を目指している。また川崎市産業振興財団が主体となり、東京大学、国立がん研究センターが参加する医工施設“ (仮称) ものづくりナノ医療イノベーションセンター”が文科省の“国際科学イノベーション事業”に採択され、これも 2014 年に運用を開始する計画が進んでいる。